荒神宮の由来

御祭神　建速須佐乃雄命
合殿神　興津比古命
　　興津比売命

我国の神々は、それぞれの御徳も持分け給ふて、国土経営国運隆昌と各家の安全繁栄を守る奉る。当社御祭神は天照皇大神の御弟神に坐して、健く雄々しく大神の御許天上に参上りの時、勇往邁進の御行ひあり、其御神威に人々は恐れ畏み、世の騒がしきは静まって、平和と幸を招くを教え授け給ふた、又比古、比売神は生活の根本火食の法を示し、又火鎮の御徳を現して各家の中心に位する、かまどを守護子孫繁栄の恩頼と生活を司どる大神に坐す。

◆鎮祭と災害の変遷

本社創建は不詳であるか、治承四年夏木曽義仲は、高倉宮以仁王の命旨を承り平家追討の義兵を当国依田の里に挙げた時、木曽に住む中三権守中原兼遠は一族を引具してこれに応じて、出陣のときその子今井蔵人に木曽義仲の荒神神像を託して、木曽一門の武運を祈らしめた。

その後、木曽義仲歿後中原兼遠の女である、巴御前は、尼となって当所へ来り潜居の親故の人に会ひ、出軍以来の始末を物語り、改めて社を造って荒神宮を祀った。世の遷移に伴ひ、栄枯盛衰を重ねつつも、今井一族は社を護って別当職として、代々奉仕、御社頭の繁栄につとめた。鎌倉時代もすぎて大いなる戦乱もない治世となったので、次第に御社も世に知られて、庶人の生活の基づく荒神信仰篤く、自国他国普く利生を仰ぐ参詣賓者多く、神楽の鈴の音絶ゆることなし云々と云ふ。

（以上は二十五代別当今井兼春の記す由来記と上田往来及び木曽公旧古実（木曽家後えい木曽源太郎著書）による。巴尼は越後友松の里に住み宝治二年九月九十一歳で歿す法名あり。）

関ヶ原戦後、徳川の治世となって、天下は静まり庶人落付いて生活出来る時代となり、代々の上田藩主（仙石、真田、松平氏）も信仰篤く寄進奉賽あり、世人の信仰又深く多く、殊に江戸、北関東、桐生、高崎、富岡地方より、講中代参者多く、殊に群馬県、甘楽町、吉井町、多胡地方に、木曽、福島あどの村ありこの地方に其昔治承年中木曽義賢一族の居住地であった縁故によって、当宮へ諸寄附や石造の常夜灯の寄進もあった。寛保二年八月二日千曲川上流の集中豪雨のため氾濫、大洪水のために上田町南岸地方は、人家田畑の流失多大、殊に小牧村、中村は全戸流失現在の地に移住したといふ。（仙石文書）このため当社も、社地三万坪の大約を失ひ、災害を受けた。又文化八年二月二十九日夜の四ッ時、社の隣家出火、荒神社の一切と附近の人家二十戸全焼、雁遷坐を行った。

（諏訪形村長百姓今井万兵衛其他より火災による救済方を藩役所へ願出書ありこれによる。）

この火災より八年を経て、文政二年六月仮配電竣工（屋根瓦の銘）安政四年現本殿再三建に着工、村内、上田地方、東京、北関東地方に及ぶ信者の浄財を得て、文久三年三月十五日竣工遷坐祭執行。

（大工棟梁竹内八十吉の請書と棟札による文化の火災より安政の着工迄六十年をけみした。）

盛大な月余に渉る祝祭のため、附近の農家はにわかに参詣宿となったので、上田宿の旅籠組合より無許可営業であるとして藩の役所へ訴へたという。世は明治と改り諸変更に伴ひ、社の経営も困難し別当家の私材も失ひ社地も千五百坪余となったが、荒神宮信仰の古い伝統と尊い神徳の応援の恩頼によって、再三度御社頭も賑わしく、大正十一年十月神宮奉祭会長藤岡好古氏祭主となって、東大名誉教授法学博士筧克彦氏の研究により御祭神の天上に参上りの神事によって参上の宮と称奉って報告祭を斉行した。

明治、大正の時代は陸、海、空三軍の将官又旧公卿三十氏等の参拝賛助、鷹司氏の大幟奉納、其他諸名士、県内外の篤信者の賛助、参拝する人多く社頭は賑わった。昭和の大戦中は出征軍人家族の参拝参籠多く当宮は一万度祓での行事を斉行軍人と其家族の安全祈願祭を行ひ続けた終戦後の昭和二十七年三月拝殿を付属建物の改築に着手、用材は旧御料林、払下げの木曽檜材二十八年十月造営竣工、この新築資金は地元区内、上田市其近郷、県内外の篤信家又荒神講員等六百余名の浄罪寄進による、其寄進者各位の御芳名は記録して本宮内に納め永代保存してその御志を謝し奉り年頭に感謝祭を行ふを例とする。

引続き各位の御篤志を仰いで神徳講代参講を結成して広大無辺の神恩と社会の恩とに報ゆるため平和な世をつくる集ひを行ふ為、又当宮護持保存の為御賛助諸彦各位の御入会を乞願ひます。

（本宮は内務省令により明治四年四月長野県神社明細帳に登録）

昭和六十年正月

信州上田市諏訪形
荒神宮　参上神社
三十代　別　当　敬　白

◆指定文化財

○本宮壱棟（名工竹内八十吉宣吉作）
　徳川時代唐様建造物

○五輪塔、鎌倉室町期の石造塔

○境内の欅樹木、樹種保存林指定

○奉納絵馬周百枚、金のわらじ、塩の道の絵馬、其他

◆祭

日		
○一月一日	歳旦祭	
○一月二日	御弊講祭	
○一月十五日	仝上	
○二月節分日	節分ついな祭	
○二月甲子日	甲子七福祭	
○四月十日	春期祭と御弊祭	
○七月十五日	祇園夏越祭	
○十月十五日	保存会講祭	
○十一月一日	新穀祭	
○十二月三十一日	大祓と年越祭	